52. オリパラ開催

東京オリパラ（オリンピック・パラリンピック）の開催についてのニュース・記事がことさら多くなってきた。NHK はあまり放送しないようだが。

特に、政府の新型コロナ感染症対策分科会の尾身会長が国会での答えで、「普通は（開催は）ない。このパンデミック（世界的大流行）で」、「開催するにしても、無観客を念頭に開催の規模をできるだけ小さくして、管理の態勢をできるだけ強化するのが義務だ」、「そもそも五輪をこういう状況のなかで、何のためにやるのか。それがないと、一般の人は協力しようと思わない」と発言してから急に多くなった。

コロナ対応の昨年からの経過と難しさを考えると、コロナ対策とオリパラの開催とは両立しないと思っていたので、尾身会長の発言は当然のことと受け止めた。むしろ遅すぎたとも感じた。が、田村厚労相はこの発言を「自主的な研究の成果の発表」といい「公式な意見」ではないとした。任命しておきながら何と冷たい仕打ちか。丸川五輪相は「我々はスポーツの持つ力を信じてやってきた。全く別の地平から見てきた言葉をそのまま言っても通じづらいというのが実感」と意味不明の言葉を述べた。無視したいということか。強烈なウィルスに対して「スポーツの力を信じる」という感性を言っても何の効果もない。スポーツの力でコロナウイルスを撃退できるとでも思っているのだろうかと疑いたくなる。

コロナによる死亡者数が 13,500 人（6 月 7 日、累計）というし、医療施設の逼迫なども問題だ。これで国民の命や健康が守れているのかと思うが、菅首相に至っては「コロナ対策を徹底することで国民の命や健康を守り、安全安心の大会を実現する」と従前通りの抽象的な発言を繰り返すだけだ。安倍前首相が言いだし、菅首相が引き継いだ「人類がコロナに打ち勝った証（あかし）」との大言壮語はさすがに恥ずかしくなったのか言わなくなったが、コロナウイルスをどう撲滅するのかを具体的に且つ科学的に、そしてコロナで困っている人たちをどう支援するのかを、国民に誠意をもって語り実践するのが今の首相の最優先事項ではないか。何が何でもオリパラを開催したい菅首相には、尾身会長の発言は「はらわたが煮えくり返る」思いに違いないが、それは自分勝手な思いで、国民の方に向いていない。菅首相のかたくなな姿勢が田村厚労・丸川五輪相への発言に繋がっているに違いない。オリパラを成功させ、落ち込んだ支持率の向上を図り、衆議院選を有利に運び、首相続投を目論んでいるのだ。オリパラを政治利用しようとしているのは明らかだ。コロナ禍で国民の 60 ～ 70 %が中止か再延長を望んでいる中で、無理して開催しても盛り上がらない白けた大会にしかならないと思うのだが。

現在考えられているオリパラの人数規模は、選手 15,000 人、海外からの関係者は大幅に絞ったとはいえ 78,000 人で、計 93,000 人。他にボランティアら国内関係者は延べ 30 万人という。これだけの人数がいて、色んな場面で密が避けられるのだろうか。試合の場面や準備のことに思いを巡らせば色々な密が想定され、感染対策の難しさは誰でもわかる。感染力の強くなった変異株とともに安全安心の大会を実現するのは、「温暖で理想的な気候の時期」と偽って誘致した暑さの問題と相まって至難の業だ。今年も開催時期は例年以上の暑さが予想され、数年前には「命にかかわることもある危険」と放送されていた暑さの安全安心策の話は、聞かれなくなった。

そして観客をどこまで入れるか、まだ明確になっていない。コロナの状況次第という訳だ。無観客なら、そもそも何のためのオリパラなのかを問われなければならない。一方、ある記事は「都内公立校（小中高生）五輪 81 万人観戦変えず」と政府と組織委員会の姿勢を伝える。このコロナ禍の中でそんなことになったら大騒ぎだろう。このことに限らず、オリパラをどのようにもっていこうとしているのか、具体的な話を組織委員会の武藤事務総長あたりはもっと明確に発信すべきだと思う。

いずれにせよ（菅首相がよく言う接続詞だが）、「一度決めたことは絶対変えない」というのは時と場合による。日本学術会議の新会員任命拒否問題みたいな頑なな態度は止めて欲しいと思うのだが。

（2021 年 6 月 8 日）